

“自信をもって主体的にたくましく生きる” 子供の成育を目指して

豊島 瑞穂

はじめに

1. 研究動機

「現代の子どもは変だ」と言われる。例えば、すぐにキレル、問題にぶつくと逃避する、人間関係が築けない、無気力等がある。確かに、いっこうに減らない、いじめの問題に加えて、新しい問題行動が次々と報道されている。本当に「子どもが変」なのだろうか。

私が通った公立高校はとても自由だった。大学への進学率は高かったが、進学指導といわれるものは存在しなかった。教師が「勉強しろ」と言うこともなかった。まして、成績順位表を貼り出す事もなかった。そのかわり、教師は生徒を信頼し、生徒の興味をひく授業を行っていた。そのような環境のなかで、生徒は、部活動や行事に一生懸命取り組んでいた。そして、多くの生徒が生き生きと活動しながら、学校の問題や社会の問題、自分の将来についてよく考えていた。彼らは、問題にぶつくと、よく考え、よく協力し、積極的に行動した。そこでは「現代の子どもは変」ではなかった。

この高校での経験から、「子どもが変」ではなく、子どもを取り巻く学校環境が変なのではないだろうかと考えるようになった。また、このような自由な学校では、子どもは“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つと確信した。

では、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもとは、どのような学校環境で育つか、という疑問からこのテーマを選んだ。また、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つ学校である「きのくに子どもの村学園」と「風の谷幼稚園」に出会えたことも、このテーマを選んだもう一つの理由だ。

2. 研究対象校の紹介

「きのくに子どもの村学園」

創設者は、大阪市立大学生活科学部の教授だった掘真一郎氏。専門は、世界で一番自由な学校といわれる「サマーヒル・スクール」を創設したイギリスの教育思想家 A.S.ニールの研究。1986年、日本にも「サマーヒル・スクール」のような学校の創設を目指し、「新しい学校をつくる会」を発足。1992年に「きのくに子どもの村学園」を開設する。

「きのくに子どもの村学園」は和歌山県の東北の端、橋本市の山間に位置する。現在では中学校と高校も併設する。小学校は、全学年で100名前後の小規模校だ。基本方針は「自己決定」、「個性化」、「体験学習」である。

主な特色は、学校の決定事項を、全てミーティングで決定すること。授業は、プロジェクトと呼ばれる体験学習を核に展開されていること。また、教師がニックネームで呼ばれる等である。

「風の谷幼稚園」

創設者は天野優子氏。14年間勤務した幼稚園を退職した後、現在の幼児教育に疑問を感じ、理想の幼稚園を創ろうと決心する。2年間の奔走の後、1998年に開園する。

「風の谷幼稚園」は、神奈川県川崎市、多摩丘陵緑の林のなかにある。園児数は150人前後。基本方針は「体を動かす」、「手を使う」、「いっぱい歩く」、「親も一緒に」である。

主な特色は、日常生活に関わる、食べることや乗り物などの体験学習を重要視していること、人間関係のつながりを体感する縦割りの行事や養護老人ホームの訪問があること、野山をたくさん歩き、ポニーにも乗ること、のこぎりや包丁を使って活動する等がある。

3. 研究の概要

本稿は、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校とは、どのような学校かを、その理念と実践を研究することによって明らかにしたい。

まず、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもとは、どのような子どもであるかを、感情面、知性面、人間関係面から述べる。

次に、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校とは、どのような原則に則っているかを、「きのくに子どもの村学園」の3つの基本方針から考察する。「現代の子どもが変だ」と言われるようになった学校環境を検証することによって、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校を浮き彫りにする。

ここで、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校の実践を「きのくに子どもの村学園」と「風の谷幼稚園」から紹介する。

「きのくに子どもの村学園」は、特徴ある授業形態を中心に調べた。特に、今年から公立学校で導入された「総合的な学習」と関連づけて述べる。

また、「風の谷幼稚園」の実践は施設面と活動面に分けて調べた。活動面においては、「きのくに子どもの村学園」との共通点に注目して述べる。

最後に、以上の研究によって得られた結果をまとめる。そして、今回の論文を書くことにより生じた今後の展望について論じたいと思う。

第1章 “自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもとは（省略）

第2章 “自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校とは

1. 「きのくに子どもの村学園」の3つの基本原則から

- ・ 自己決定：子どもの意志を尊重し、子どもの内からの成長を信頼する。
- ・ 個性尊重または個性化：個別学習や小規模のグループ学習を柔軟に組み合わせて活動を多様化する。
- ・ 体験学習：農業、大工工事、印刷、裁縫、食事づくり、そして地域活動など、さまざまな実際の仕事を教育内容の中心にすえ、創造的な思考の態度と能力を伸ばす。さらに、自治を通して社会生活の知恵を育む。

（2. ～4. 省略）

5. 3つの原則の統合

〈自己決定の原則〉

- ①教科書やドリルをすすんで学習するというのではなく、子どもみずからの思考と行動と生活を通して、広くものの見方を形成する。
- ②多様な選択が可能な学校。したいことが山ほどある学校。
- ③教師の仕事は、子どもの心をとらえ、成長をうながす魅力ある活動をふんだんに準備することである。
- ④自己決定には自己評価がともなわなければならない。

〈個性化の原則〉

- ①個性尊重と学習の多様化は切り離さない。個性を尊重するには、多様な活動が用意されたプログラムが不可欠である。
- ②たんなる個別化と個性化は別物である。教材や活動が画一化されていて、学習のペースだけ能力別なのは、個性化ではない。
- ③個性を尊重するには、グループ学習や時間配分を十分に柔軟にしなければいけない。
- ④個性化教育とは、ひとりひとりの子どもが自分自身になることを援助する教育である。つまり感情面でも、知性面でも、人間関係面でも“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもを目標とする。

〈体験学習の原則〉

- ①体験学習とは、子どもが手と体と知性を存分に使って、衣食住などの生活の中核に関わる仕事に従事することである。
- ②体験学習は、たんなる手作業ではなく、自発的な知的探求でなくてはならない。

③体験学習は、教科学習の補完物ではない。すべての学習の出発点となる。

④体験学習を取り入れれば、必然的に自己決定が必要になる。

以上の要約からもはっきりするように、自己決定の重視と個性化教育と体験学習の諸原則は、切り離すことはできない。例えば、自己決定を重視するといっても、子どもの心をとらえるような活動が用意されていなければ、子どもは生き生きと活動できない。個性を重視するといっても、それぞれの子どもが、教師から厳しい指導を受けていたのでは、“主体的に生きる”ようにはならない。また、教師の監督のもとに、話し合いもなく、同じ作業をおこなったところで、本来の体験学習とはいえない。自己決定と個性化と体験学習とは、同一の“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校の三つの側面だといえる。

第3章 “自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つ学習形態 ～「きのくに子どもの村学園」の実践から～

第2章では、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校を、「きのくに子どもの村学園」の3つの基本原則から考察し、明らかにした。“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校とは、自己決定を基本とし、個性化を徹底した、体験学習による活動を中心においた学校であった。

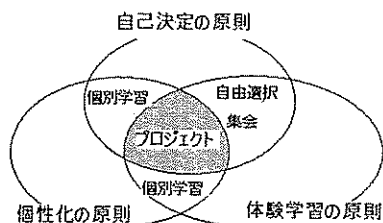
第3章では、この基本原則に基づいた「きのくに子どもの村学園」の学習形態を紹介する。特に、全ての学習の中心にある「プロジェクト」は、2002年から開始された「総合的な学習」の大きなヒントとなると考える。「総合学習」は、子どもの「生きる力」の育成を目指し、教科の枠を超えた総合的・横断的な指導を展開するものである。「総合的な学習」を有効に活用すれば、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助することができるかと確信できる。

以上の理由より、「きのくに子どもの村学園」の学習形態の中から、特徴ある「プロジェクト」を中心に、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つ学習形態の実践を紹介する。

1. 主な学習形態

自己決定、個性化、体験学習の基本方針は、徹底し、しかも統合して具体化されなければならない。どこかひとつだけが強調されていても、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助しがたい。例えば、体験学習だけが強調され、自己決定と個性化の原則が無視される場合を見てみよう。教師が、活動の重要な決定を行い、しかも画一的な作業中心の授業になるかもしれない。学習の個別化のみが導入されても、教師中心のドリル学習がまかり通ってしまうだろう。このようなことに陥らないように、「きのくに子どもの村学園」では、3原則を重ね合わせて4つの学習形態を示した。

「きのくに子どもの村学園」の活動形態（きのくに教育研究所編集『体験学習と子どもの成長』6頁）



図にあるように、「プロジェクト」は3つの原則が十分に重なり合う形態、つまり最も大切な活動形態になっている。「基礎学習」と「自由選択」と「個別学習」は、いずれか2つの原則が残りの1つの原則よりも優位な形態だ。以下、4つの学習形態について紹介する。

(1) プロジェクト

「プロジェクト」とは、3つの基本原則の重なり合う形態である。だから子どもが、自分で決めたり選んだりしたテーマで、その中で個人差や個性が生かされる活動になっている。

さらに、「プロジェクト」とは、デューイの「活動的な仕事」の考えを具体化した体験学習である。主として実際生活、中でも地域社会の諸問題に題材を求め、時間をかけてその問題に取り組む。また、「プロジェクト」はたんなる手作業や肉体労働ではないのだ。一種の知的探求である。子どもたちは、知的好奇心を刺激する問題や活動に取り組む。そして、自分の頭と体と手を存分に使って、みずからの生活を豊かにする喜びと、成長する実感を味わう。その過程で、学ぶ楽しさや仲間との触れあう喜びも実感する。「プロジェクト」は週に14時間ある。

(2) 基礎学習

「基礎学習」は、自己決定と個性化の原則が全面に出る一方、体験学習の原則がやや後方に退く形だ。ひとりひとりがみずから学ぶ、という点では「プロジェクト」と同じなのだが、学習の題材や教材に抽象的なものも取り入れられる。具体的には、「プロジェクト」のなかで生じた問題の解決のために資料を収集したり、関連教科の学習をしたりする時もあれば、読み書き算のような基礎技術の習得をする時もある。時間数は週7時間。

(3) 自由選択と集会

「自由選択」は「プロジェクト」と同じように自己決定と体験学習の原則は大事にされるが、ひとりひとり別々にというよりも、集団で行われる活動である。具体的な中身は、体育、図画工作、音楽に関するものが多い。他には、英会話やおやつづくりなどもある。子どもはこれらを学期ごとに選択する。

「集会」は、さまざまな場面で、さまざまな形で開かれる。全校生徒153人と教師も加わった全校集会は週1回行われる。内容は、約束ごと（校則）を決めたり、行事の計画を立てたり、もめごとの処理をしたりする。クラスごとにも頻繁に話し合いが行われる。例えば、修学旅行の内容全てを決めるのも話し合いだ。5月に話し合いが始まって、最終的に決まったのは10月だった。

(4) 個別学習

「個別学習」では、ひとりひとりが計画を立て、大人の助言や指導を受けて学習する。具体的な内容としては、学習に困難を持つ子の指導、学期演奏の指導、個別に助言を求めてきた子への対応などがある。開校当時は、週に2時間とってあったが、現在では「プロジェクト」と「基礎学習」のなかにふくまれている。小規模校なので、個別の指導はいつでもどこでも行われていると言ってよい。

2. 「プロジェクト」について

「きのくに子どもの村学園」の学習形態のなかで最も特徴的なのが、週14時間もある「プロジェクト」である。子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校としての要素が詰まっている。この要素を正しく理解することが、「総合的な学習」を楽しく実り豊かなものへとする第一歩であると考え。そしてそれは、子どもを“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育てる一歩にもなる。ここでは「プロジェクト」の特徴についてまとめた。

①「生きること」をテーマとする

科学も哲学も、もとはヒトが生きるための基礎的な営みから出発している。基礎的な営みとは、食べること、着ること、住むことである。この衣食住をテーマにすることが重要である。なぜなら、子どもの知的好奇心を刺激し、幅広い領域へと展開することが可能だからだ。

②手や体を使う活動である

人類の財産としての知識や技術は、具体的な行為や営みの結果として創造され、蓄積され、活用され、修正されて伝えられたものだ。知識や技術の発生の原点にもどって、知る喜びや創造する楽しみを味わう。

③それ自体が目的である活動

活動の有用性や必要性が、生き生きと実感される時、子どもは好奇心をそそられ、意欲をかき立てられる。子どもの現実から遊離した内容やままごとの遊び、または、教師から押しつけられた課題などでは、子どもの心をとらえることは難しい。有用性や必要性のある活動のみが、子どもの心を深く、継続的にとらえることができるのだ。

④自発的な知的探求

子どもが積極的に観察し、仮説をたて、解決策をまとめ、実験により確認する。結果が思わしくなければ、またやり直す。教師は正しい結果へと誘導しない。失敗することは、子どもにとって成長のチャンスである。「プロジェクト」とは、手と体と、何より頭を使った活動である。

⑤知識を道具として使う

観察、仮説、検証のいずれにおいても、すでに獲得された知識や、新しく収集した情報は役にたつ。自主的に考える子どもは、そうした知識や情報を上手に使ったり、新たに探したりする。既成の知識は、問題解決のための有用な道具である。

⑥子どもが創造した新しい知識

新しい知識とは、その子にとって新しいという意味である。知識や技術の発生をなぞる結果の、子ども自身が創造し蓄えた知識だ。だからこそ、活動の遂行に役にたつだけでなく、視野を広げ興味を拡大させる。

以下は、2002年度の「プロジェクト」のテーマと内容である。

- ・「ガーデンセンター」園芸、庭づくり、木工、建築
- ・「ファーム」米作り、野菜づくり
- ・「ひつじハウス」ヒツジの飼育、織物
- ・「郷土料理点」日本と世界の料理
- ・「クラフトショップ」焼き物、木工

(きのくに子どもの村著『体験学習と子どもの成長』より)

第4章 “自信をもって主体的にたくましく生きる” 子どもが育つ学校 ～「風の谷幼稚園」の実践から～

第3章では、“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学習形態を紹介した。

ここでは、「風の谷幼稚園」の実践から、その細部にまでいきとどく理念を紹介する。筆者はこの幼稚園に約3ヶ月間通い、理念の実践を観察した。その理念は、「きのくに子どもの村学園」の基本原則と全く同じというわけではない。対象とする年齢も違えば、学校創設の経過も違う。しかしどちらの学校でも、子どもが“自信をもって主体的にたくましく生きる”ように育っていることは確かである。

では、どのような点が共通してみられるのだろうか。またそれは、自己決定、個性化、体験学習の3原則、その統合に当てはまっているのだろうか。以上の論点で述べていきたい。

第4章では、「風の谷幼稚園」で大切にしている4つの基本を紹介する。次に、「風の谷幼稚園」の実践を施設面と活動面に分けて紹介する。

(1. 省略)

2. 細部までいきとどく理念

(1) 施設面について

①挑戦や冒険のできる環境

多摩丘陵の一角にある「風の谷幼稚園」は、畑や雑木林に囲まれた場所にある。

縄跳びやリレーをするために、歩いて15分程の運動場に行く。帰りは畑に寄り、雑草を抜いてから帰ってくる。近所の公園に行くには、果樹園の中の尾根道を30分かけて歩く。子どもは「これ食べられるかな」と木や草に興味津々だ。

園の周りには、柵や堀がない。園から出てはいけないと言う規則もない。つまりここでは、周

りの自然全てが遊び場なのである。また、園には鉄製のブランコやうんていもない。しかし、子どもはそのような遊具がなくても自然のものを代用し、創造力を働かせて遊んでいる。

創設者は「子どもは、ひとりひとり違う。それぞれたくさんの可能性を秘めている。その可能性を大人の都合で摘んでしまうことは絶対にしたくなかった。子どもたちが、いろんな事に挑戦したり冒険したりできる環境にしたかった」と語る。これからもわかるように、「風の谷幼稚園」は自己決定を重んじ、ひとりひとりを大切にしている。

②人間に快適な環境

700坪（2300平方メートル）の建物は、屋根があるだけで全て外と直接つながっている。シンプルな木造づくりになっている。

普通の幼稚園のように、ピンクや水色のカラフルな色がみられない。

その理由は、大人の子どもを観を押しつけないというものである。子どもにとって快適な環境とは、大人にとっても快適なものである。

③一流を体感し、地域とも交流できる環境

一流の文化や芸術に触れる機会を提供したいという考えから舞台を備えている。能や寄席やコンサートが度々開かれる。

また、コンサート等を通して地域の人との交流の場にもなる。

吹き抜けのエントラスホールも同じような目的から作られた。地域の人や保護者も一流の芸術にふれられる場所として使われている。この時は、世界の名作集の絵を展示していた。このギャラリーの内容は、ひと月ごとに変わる。

1月には、床に畳を敷き詰め、遊びの部屋になる。子どもたちはカルタ、おはじき、百人一首に興じる。

④成長の自覚を促す環境

廊下は幅2メートルとゆったりととってある。子どもたちが走り回っても安心のように計算されている。

教室の位置が、階段数段分ずつ高くなるように設計されている。年少、年中、そして年長が一番高くなっている。

その理由は、階段を上がるという体験が、年齢がひとつ上がるという実感に結びついていくのだ。成長の自覚を促す仕掛けのひとつである。

年少の教室にあるテーブルは、特注の丸テーブルである。詰めて座れば10人でも11人でも座ることができる。自分の仲間がこんなにもいるということを、目と体で感じられるような作りになっている。

年中と年長のテーブルは、活動の幅が広がるので、組み合わせやすい長方形になっている。丸テーブルと長方形のテーブルには、それぞれの発達段階に応じた意味があるのだ。

(2) 活動面について

「風の谷幼稚園」は、子どもが“自信を持って主体的にたくましく生きる”ように育つことを援助する学校である。その細部にまでいきとどく理念は、全て実感と体感を大切にしている。つまり体験学習を重視しているのである。その体験学習を通して、他者と並んだり競争したりするのではなく、自己に向き合い成長することを学ぶ。その中で、他者との共感や感受性を育む。自己決定と個性化の統合である。

「風の谷幼稚園」の活動は「きのくに子どもの村学園」と規模こそ違うが、3原則の統合の「プロジェクト」によく似ている。体験学習、自己決定、個性化をととても大切にしていることがわかる。以下見てみよう。

①自分の責任を体感し、喜怒哀楽を実感するサツマイモ掘り

毎年恒例のサツマイモ掘りでは、園から徒歩30分程の畑に出かけていく。このサツマイモ掘りには、特別のルールがある。みんなで一緒に食べる2本のサツマイモ以外、掘ったものは全て自分のものになるのだ。だから子どもたちは、「お母さんに持って帰る」と一生懸命に掘る。

やがて、持ちきれない程のサツマイモを背負って帰る。自分の責任で持って帰れないものは、持ってもらった先生のものになってしまう。そうならないように、子どもたちは泣きながら、でも泣き言は言わないで園まで歩くのだ。

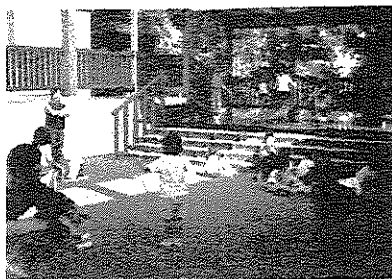
このサツマイモ掘りは、自分の責任を体感するためのものだ。「たくさん持って帰る」という目標を自分で決め、その目標を達成するために努力する。自己決定の原則だ。だから、文句や甘えは存在しない。

そして、この行事にはもうひとつの意味もある。

掘りが大変だからと、2本しか掘らない子どもも中にはいる。家に持って帰る分がないため、寂しい気持ちを味わってしまう。「風の谷幼稚園」では、この寂しい気持ちも、嬉しい気持ちや楽しい気持ちと同じように大切にしている。なぜなら、人間は葛藤しながら成長するもので、喜怒哀楽すべての感情が大切だと考えるからである。

②「たての関係づくり」

人間は、いろいろな人間関係のなかで生きている。年上の人、年下の人、同年代の友だち。いろいろな人がいる事を理解し、その人が自分とどのように関わっているかが分かったら、人に感謝したり配慮したりする感情が生まれてくる。



しかし、現代はこのような機会が少なくなっているため、上手な人間関係を築けない子が多い。そこで「風の谷幼稚園」は、あらゆる活動をとらえて「たての関係づくり」をすすめている。

「風の谷幼稚園」の入園式は、新入園児と関わる最初の活動だ。もちろん在園児も式に出席する。式では、年長の子が「困ったことがあったら私たちに聞いてね」と迎える言葉を発表する。新入園児の面倒を見ようと決めたのも、迎える言葉を発表しようと思ったのも子ども自らだ。ここでも自己決定が大切にされる。

子どもの日集会では、年長の子どもが作った特大鯉のぼりの中を、年中と年少の子どもがぐって遊ぶ。特大鯉のぼりは、年長の子もたちがデザインを決め、色づけする過程全てにおいて意見を出し合い、協力して作ったものだ。そして、当日特大鯉のぼりを持って、年下の子もが通りやすくするのも、鯉のぼりの中を誘導するのも年長の子もだ。

子どもは親切にされたことは、必ず覚えていてほかの人に返してくる。また、人から感謝された経験を持つ子どもは、ほかの人にもそのようにする。「たての関係づくり」では、人に親切にされたり感謝されたりした経験が自然に生かされている。

③ルールの必要性を実感する活動

「風の谷幼稚園」では、協力して取り組まなくてはいけないような活動をたくさん組みいれているので、話し合いが重要になってくる。子どもたちは、ひとの意見が聞けるだけでなく、話し合いの決め方まで論じられるようになる。その過程の代表的なものが「リレー」の活動である。

始めは、めいめいが持っている「リレー」のイメージから入る。途中、人数が合わなかったり、コースが違ったりと矛盾が生じてくる。これに気づき、解決するための取り決めを自分たちで作っていく。この過程を通して、ルールは必要に応じて作るものだということを学習していくのだ。この活動も「きのくに子どもの村学園」の「集会」によく似ている。「集会」は自己決定と個性化の統合であった。

④自分へ挑戦するための活動

自分へ挑戦するための活動、それは「縄跳び」である。年中の子どもは、縄をなかなか飛ぶことができない。飛べるようになるための過程に、この活動の意味がある。

縄跳びのレベルに合わせてランクを設定し、上達していく過程を本人にも自分以外の人にも分かるようにしておく。そして、飛べるようになるには、どうすればよいかをひとつひとつの動きまで、分かりやすく説明する。こうすることによって、友だち同士アドバイスできるようになる。自分に挑戦することで、他者との共感を生み、学び合うことができる。

年長になると誰でも飛べるようになるのが、縄跳び活動の特徴だ。飛べるようになったので、次は技や工夫への挑戦が始まる。ここでも、自然に学び合いながら自分への挑戦が行われている。「縄跳び」の活動は、体験学習と個性化が重視されたものである。

⑤失敗することを恐れないようにする活動

「風の谷幼稚園」には、失敗という言葉は存在しない。何か障害にぶつかれば、どうすればよいかを考えさせるからだ。

その代表的な活動が木工の活動である。釘打ちを失敗しても、木なので何度でも打ち直すことができる。釘を抜いた跡でいっぱいの木片も、「裏を使えば打てる」と指導する。問題に対して、少しもひるまず解決しようという態度が育つのだ。

⑥分かることを体験する活動

動物園に行き、キリンは大きいということを見せても、子どもは大きいということを実感できたかどうかはわからない。子どもは、目で見たから分かったとはいかないという。

では、どのようにすれば、大きいということを実感できるのか。布に等身大の絵を描く。この等身大のキリンに、年少児の手で模様を描いていく。いつまでたっても、キリンの模様はできあがらない。できあがったキリンのお腹の下をくぐる時に、「すごい、大きい」と驚く。こんな体験が、キリンは大きいということを実感させる手だてになる。



⑦なぜこうなのかを実感する活動

「風の谷幼稚園」では、道具は本物を使っている。かなづちは危ないからといって、プラスチック製にはしない。かなづちの先が重いのに、理由があるからである。子どもは、かなづちを使って活動するうちに、その有用性を理解する。道具が、なぜそのような形であるかを実感する。実感すると、その正しい使い方がわかり、扱う際の注意もできるようになる。

このように、「風の谷幼稚園」では言葉だけの注意はしない。その意味と有用性を実感すれば、子どもは自分で考え行動できるのだ。

だから教師は、どのようにすればその子が実感を持って理解できるかを考え、工夫している。そのために園児全員の名前を覚え、ひとりひとりの活動記録を毎日細かく記録している。

以上見てきたように、「風の谷幼稚園」は体感と実感を大切に、あらゆる場面で自己決定を取り入れ、徹底した個性化教育をしている。ここでも、自己決定、個性化、体験学習の原則は当てはまっていたのだ。もちろん「風の谷幼稚園」と「きのくに子どもの村学園」が全て同じではない。しかし、どちらも「自信を持って主体的にたくましく生きる」子どもが育てられている。

このことから言えることは、たとえその学校の条件が違っていても、「自信を持って主体的にたくましく生きる」子どもが育つことを援助する学校とは、自己決定、個性化、体験学習を重視していることが分かった。

おわりに

本稿では、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校とはどのような学校かを、ケーススタディとして「きのくに子どもの村学園」と「風の谷幼稚園」の実際から抽出し明らかにしてきた。

その結果、まず“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもとは、感情的に開放され、自分で考える態度を持ち、共同生活のなかで民主的な行動の知恵を持つ子どもであることが分かった。そして、そのような子どもが育つ学校とは、自己決定と個性化と体験学習の原則を徹底して進めていることが明らかになった。

また、この3原則はどのような種類の学校でも、その目的を正確に捉え実行すれば“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことがわかった。ここでいう、どのような種類の学校でもという意味は、幼稚園と小学校という対象年齢の差のみではなく、「きのくに子どもの村学園」や「風の谷幼稚園」のような私立学校と公立学校という種類の意味も含めた。その意図は、今年から始まった「総合的な学習」にある。「総合的な学習」は、自己決定と個性化と体験学習の統合である「きのくに子どもの村学園」の「プロジェクト」から応用することができるのだ。

以上、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校を、その理論と実践から明らかにしてきた。しかし今回は、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校の実践の細かい様子を取り上げることはできなかった。“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもを育むためには、その理論をよく吟味することも大切だが、実践における教師の対応やその準備の方法、観察の視点等がなくては、その理論を支えることはできない。

今後の課題としては、“自信をもって主体的にたくましく生きる”子どもが育つことを援助する学校の理論から実践へと移る際の、教師の細かい準備や対応や視点について学んでいきたいと考えている。そのために、これからも視点を絞って「風の谷幼稚園」を見学していきたい。

参考文献（省略）